



No.87 2008・4・7

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM

発行 石川県立歴史博物館

〒920-0963 金沢市出羽町3番1号

TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836

<http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/index.htm>



ISHIKAWA-KEN  
HISTORY  
MUSEUM

れ  
き  
は  
く

春季特別展

# 弥生ムラの風景

— 越のクニ生み・境界・交流 —



人面で飾る弥生土器 小松市八日市地方遺跡出土  
石川県指定有形文化財 小松市教育委員会蔵

会 期

4月26日(土)~6月1日(日)

会 場 第1特別展示室

開館時間 午前9時~午後5時

(入館は午後4時30分まで)会期中無休

入 館 料 一 般 650円(520円)

大学生 500円(400円)

高校生以下無料

( )内は20名以上の団体料金

記念講演会 <聴講無料>

日 時 5月10日(土) 午後1時30分~

会 場 学習ホール

講 師 大阪府立狭山池博物館館長 工業善通氏

演 題 弥生のたくみと日本海交流

申込不要・当日受付へお申し出下さい。

春季特別展

## 弥生ムラの風景 越のクニ生み・境界・交流

北部九州に水稲農耕が始まったのは、紀元前五世紀頃とも紀元前九・十世紀頃ともいわれ、大きな議論を呼んでいます。そのいずれにしても、その頃に加賀や能登は、まだ山野河海の恵みをきめ細かく利用する縄文社会の営みが続けられていました。

とはいえ、植物利用に巧みだった北陸の縄文人たちは、イネの存在に無関心ではありませんでした。野々市町にある御経塚遺跡<sup>おきょうづか</sup>などでは、縄文時代晩期末のイネ初物の圧痕を残す土器や、北部九州の農民が使っていた壺の類似品がみられ、イネが食料源のひとつになっていた可能性があります。稲作を受容す



弥生時代のおにぎり（ちまき状の炭化米）  
石川県埋蔵文化財センター蔵

る基盤が、縄文社会にあったのです。

やがて人びとは、本格的な水田耕作を営むため、地下水位の高い低湿地や河川の後背湿地に新たな活動の拠点をともめました。加賀市柴山<sup>しばやま</sup>出村遺跡<sup>でむら</sup>、小松市八日市<sup>やちいちじ</sup>地方遺跡<sup>かた</sup>、金沢市戸水<sup>とみず</sup>C遺跡<sup>せ</sup>、羽咋市吉崎<sup>よしか</sup>・次場遺跡<sup>すば</sup>などは、弥生時代の幕開けを告げる開拓農民のムラでした。

それらは柴山潟・今江潟・河北潟・邑地潟など、かつて加賀・能登の特色ある景観を織り成した潟湖の淵に営まれています。そこは、冠水によるリスクもありますが、潟に流れ込む肥沃な泥土に恵まれ、また、漁労・狩猟・採集などの多面的な生業も可能であったことから、未熟な稲作技術を補う柔軟な生活を保障してくれる環境だったといえます。しかも、そこは外海と内陸をつなぐ物流の基地ともなったのです。

この厳しくも恵みの多い環境は、加賀・能登の弥生文化を飛躍させる母体となり、加賀では八日市地方遺跡、能登では吉崎・次場遺跡といった中期の弥生社会をリードする「拠点集落」を誕生させたともいわれます。

その八日市地方遺跡は、周囲に多重の濠をめぐる環濠集落でした。自らの土地を濠で結界し、自分たちと他の集団を厳然と分ける意識は、水稲農耕にともなう文化要素のひとつでした。米作りの弥生ムラの風景とは、こうした境界の誕生にあったのです。



吉凶を占ったト骨  
石川県埋蔵文化財センター蔵

その濠の内側では、木製の農耕具や食器、首飾りなどに用いられる玉作りなど、自らの消費と他地域への交易品としたさまざまな物資が生産され、鳥形や武器形の木製品を祭器とした農耕儀礼も盛んにおこなわれました。

しかし、繁栄を続けた八日市地方遺跡のムラは、紀元前後（中期末）を境にして衰退へと向かいました。これは、八日市地方遺跡だけのことではなく、中期に栄えた拠点集落の多くで見られる全国的な現象です。

その背景の一つには、鉄器の獲得にともなう社会構造の変化があったとみられます。人びとは新しい耕地を拓き、生産量の増大をはかるために、前代にもまして鉄器の入手を渴望したと考えられます。そのためには、小さい集団が結束し、交渉に優れたりリーダーを擁して、鉄器・鉄素材の豊富な西方地域と



勾玉の文様で飾るハレの器  
石川県埋蔵文化財センター蔵

交渉できる集団関係と流通システムを構築する必要があったとみられます。

事実、それ以降、北陸では近隣のムラヤクニに少しでも優位にたとうと、山陰地域をはじめとする西日本各地との地域間交流が活発に展開されました。また、そのムラヤクニの命運を担った首長たちは、「四隅突出墓」や「前方後方周溝墓」など、それぞれが連携を深めた西日本地域特有の墓制を採用して、その関係を誇示しました。しかし、その後の広域首长墓は前方後円(方)墳にとつて変わり、畿内連合に押さえ込まれていきました。

本展では、八日市地方遺跡をはじめとする北陸を代表する弥生遺跡からの出土品を紹介し、米作りをはじめた弥生人の暮らしや信仰・技術にふれながら、人々の雄大な交流と戦いを経て新しい社会へと変貌していった越のクニ生みの様子を探ってみたいと思います。

主な展示品

石川県指定有形文化財

初痕のある縄文土器 (野々市町御経塚遺跡出土)  
人面で飾る弥生土器 (小松市八日市地方遺跡出土)  
鹿と狩人を描く絵画土器

(小松市八日市地方遺跡出土)  
穀霊を運ぶ鳥形木製品 (小松市八日市地方遺跡出土)

弥生時代のスプーン (小松市八日市地方遺跡出土)  
弥生時代の琴 (金沢市西念南新保遺跡出土)

吉凶を占った卜骨 (金沢市畝田遺跡出土)  
弥生時代のおにぎり (ちまき状の炭化米)

(中能登町杉谷チャノバタケ遺跡出土)  
勾玉の文様で飾るハレの器

(志賀町鹿首モリガフチ遺跡出土)  
翡翠の首飾り (志賀町山王丸山遺跡出土)

ガラスの首飾り (福井県小羽山30号墳出土)  
花卉の彫刻を施した木製高杯

(鳥取県青谷上寺地遺跡出土)  
殺傷痕のある頭蓋骨 (鳥取県青谷上寺地遺跡出土)

龍が描かれた壺 (大阪府池上首根遺跡出土)  
よみがえった弥生犬

(大阪府亀井遺跡出土の犬骨を復元)  
想像復元・卑弥呼の衣装

(大阪府立弥生文化博物館製作)



鹿と狩人を描く絵画土器  
小松市教育委員会蔵



穀霊を運ぶ鳥形の木製品  
小松市教育委員会蔵

館長随想

## 林屋辰三郎先生の思い出

脇田晴子(当館館長)



私は去年四月から、この石川県立歴史博物館に勤めるようになりましたが、折りにふれて思いますのは、林屋辰三郎先生のことです。先生は名誉顧問として現博物館建設にアドバイスされたことは何かにつけて話題となり、先生の御意見の痕跡が、館のあちこちに残っていて、懐かしく感じます。先生遺愛のしだれ桜が咲き誇っていますが、この文章が出ますころにはもう散っているでしょう。

私がわざわざ申すまでもないことですが、先生は日本中世史の泰斗でありました。私たち中世史を志す者どもは、先生の『中世文化の基調』や『古代国家の解体』などの著書を読むことから、まずは研究を始めたといつて過言ではありません。そして幼少からお仕舞などを習っていた私は、芸能史を志していましたが、ちょうど博士課程に入った時に、先生の『中世藝能史の研究』が出て、私も夫婦のような若輩にも先生は下さいました。それを拝読しまして、私は「ヤメター!



林屋辰三郎氏(1914~98・元石川県文化行政顧問、当館名誉顧問)  
当館春季特別展「近衛家陽明文庫の名宝」展覧会場にて  
1988年4月23日

と叫びました。まずは十年は新しいものはできないと思つたのです。しかし、それから四十五年あまり経つた今、やっと私も芸能史の本を出そうと四苦八苦しているのです。

亡くなられました時、新聞の弔辞に「牡丹の華麗さをたたえた史学」と書きましたのを、懐かしく思い出します。それから十年たった今も、先生への追憶の念は日々去ることがありません。私は、先生の学説を検証することから、自分の研究を出発させていきます。まずは散所論、そして都市論、芸能史、先生は度量が大きく、そして晩年には、お身体も相当に太つておられて、文字通り、胸を貸してくださいような感じがありました。私はそれに甘えすぎていたのかも知れないと、そのころの先生と同年代以上になつた現在ではつくづくと思ひます。先生の一周忌には、皆が相当私と先生の論争を面白おかしく話題にしました。私も開き直つて、「自他ともに許す先生の鬼っ子です」とご挨拶して、みんなを笑わせました。

それにもかかわらず、先生編集の市史『京都の歴史』には、私に平安期から中世後期まで、そして夫の修(編集係注：大阪大学名誉教授脇田修氏・日本近世史)に、近世期の京都の商業を担当させてくださいました。私の書いた部分だけで四、五百枚は書きました。博士課程を終わって浪人していた時で、こんな若造たちに重要部分を担当させてくださった先生の度量に、深く

感謝すると同時に、その決断の凄さに、舌を巻くのです。私たち夫婦は、それがベースになつて、最近『物語・京都の歴史』という本を作り直しました。京都市史がなかったら、到底出来なかつた書物です。



当館春季特別展「近衛家陽明文庫の名宝」展覧会場にて。右端が林屋先生。中央は近衛通隆陽明文庫理事長、その左は中西陽一石川県知事(いずれも役職名は当時)。1988年4月23日

先生は金沢で有名な林屋一族のご出身ですが、お生まれは中国だと聞いています。しかし、先生の基盤とされる文化は金沢だったと思います。奥様がお料理がお上手で、お雑煮なども金沢風のを先生のご説明で頂きました。いつもお正月には、京大での年賀のあと、そろそろと大勢で林屋家に押しかけて、豪華な奥様お手づくりのお料理をいただきました。立命館大の教え子さんたちと両方で、四十人居た時があつたそうです。どしどしと座られて、ニコニコとお料理をすめられる先生は、見るからに金沢の旦那さんの面影がありました。お料理も金沢風が基調だと申しましたが、その他、かぶら寿司やゴリ、クルミなど、金沢から取り寄せられていました。他用があつて早く失礼するといった先輩が、グズグズして帰りません。先生が遠慮せず早く帰れ、といわれるとモジモジして、「かぶら寿司まだですか」と言つたので大笑いといった一幕もありました。はからずも私も当博物館に奉職するようになって、何かにつけて、先生の思い出に浸ることの多い昨今です。

### 第2回石川の歴史遺産セミナー開催



二月十六日、「芸能の空間 神事能を中心に」をテーマに、第二回石川の歴史遺産セミナーを開催。一月開催の第一回「山のくらし」新しい歴史像を求めて」に引き続き今回の今回は、宮永一美氏、由谷裕哉氏、山路興造氏の三人を講師としてお招きしました。研究者や一般県民の皆様あわせて約八十名もの参加があり、北陸芸能史への関心の高さがうかがわれました。

### 館所蔵刀剣の保存作業



二月十八日、日本美術刀剣保存協会石川県支部会員のご協力を得て、所蔵品の刀剣に連合国軍総司令部（GHQ）が接収した刀剣「赤羽刀」のうち、加賀の刀工が手がけた室町から江戸期の刀剣七十五点の手入れを、民間ボランティアの力を活用する取り組みの一環として、同協会に依頼したものです。協会会員の皆様ありがとうございました。

## 催事日録

「れきはくコレクション2007」期間中に開催されていた関連ミニ企画「ハンスオン！箱の中身は何だろな？れきはく收藏品にみる収蔵術」、お楽しみいただけたいでしょうか。様々な形態の収納具を実際に手で触れながら、先人たちの収蔵術の巧みさを実感。まさに金沢言葉でいう「りくつな」世界の三十七日間でした。



購入資料や未公開の資料なども合わせてご紹介する展覧会でした。今回の会期中には、収蔵庫見学会や展示文書の判読学習会なども開催され、数多くの皆様にご参加いただきました。



三月二十三日、年度末恒例の企画展「れきはくコレクション」が終了。同展は年度中に当館へ寄贈された資料を中心に、

### 大好評だったミニ企画「ハンスオン！」

### 「れきはくコレクション2007」終了



常設スポット解説



れきはくゼミナール

常設スポット解説 常設展示室の資料を、当館学芸員がワンポイント解説します。毎月第一日曜日に実施。時間は午後2時から2時30分まで。どなたでもご参加できます。  
れきはくゼミナール 当館学芸員が歴史や文化に関する様々なテーマを取り上げてお話しします。毎月第三土曜日に実施。時間は午後2時から2時30分まで。どなたでもご参加できます。

月日	行事	内容
5/4(日)	常設スポット解説	「れきはくメイト情報」をご覧ください。
5/10(土)	記念講演会 (開講は午後1時30分)	弥生のたくみと日本海交流 講師 大阪府立狭山池博物館館長 工業普通氏
5/17(土)	れきはくゼミナール	「れきはくメイト情報」をご覧ください。 当館ホームページでもご案内しています。
6/1(日)	常設スポット解説	
6/21(土)	れきはくゼミナール	

開講時間：午後2時～(記念講演会は午後1時30分～)  
会場：常設スポット解説：関係各展示室  
れきはくゼミナール：学習ホール  
記念講演会：学習ホール  
受講料：無料 常設スポット解説は無料。ただし他の展示もあわせて観覧の場合は入館料が必要。  
申し込み：不要 当日受付へお申し出下さい。

### 行事日録(5～6月)

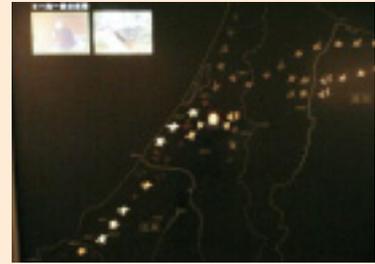
れきはく  
トリヴィア

「一向一揆の盛衰」解説装置

前号に引き続き、当館開館以来ずっと休みなく稼働している古参の一つをご紹介します。第1展示室右奥にそびえ立つ「一向一揆の盛衰解説装置」です。

加賀の一向一揆は「百姓ノ持タル国」と呼ばれ、日本史の中でも注目を集める事件の一つとして、よく知られています。でもこの「一向一揆」の歴史たるや、よく調べてみると、なかなか複雑で百年もの長きに渡ります。これを「小・中学生にも、やさしく分かるように解説できる方法はないだろうか?」そんな思いから生み出されたのがこの解説装置なのです。

まず一向一揆の重要な転機となった戦いや事件を、五項目に整理しました。でも文字や音声解説だ



「一向一揆の終局」電飾部分

けでは、どうしても専門用語が多くて難しくなります。事件のイメージもなかなかつかむことができません。そこで子供たちにも「目で見て分かる」ように、様々な工夫を凝らしました。たとえば、「武将」

「一揆軍」「城」「寺」などを表す場合、その頃（昭和六十年代）よく使われていた色違いの電球点滅表示という方法をとらずに、具体的な形で表す方法を採用しました。さらに、一向一揆の中心的な役割を果たした人物や場所などをコルトン（電飾パネル）で表示し、静と動を組み合わせたパネルに仕上げました。当時としては最新のコンピューター制御システムも導入し、画面の動きに合わせたナレーションや効果音も挿入。当時の担当者によれば、シルエットの図案や画面の動きの調整に時間がかかり、完成までずいぶん苦労したようです。

この労作も二十年以上が経過した今、他の多くの博物館で目にする最新鋭解説機器に比べれば、かなり古風な部類のものになりました。しかし文明三（一四七二）年の蓮如の吉崎布教から、天正八（一五八〇）年の鳥越城落城までの一向一揆百年の歴史を、わずか四分足らずの間に、鮮やかに説明してしまつこの解説装置。その力にいささかの衰えもありません。

次回の展覧会

石川県立美術館コレクション展

九谷の流れ 古九谷・再興九谷

4月19日（土）～5月18日（日） 第2特別展示室

九谷の流れ 古九谷から現代の名工

6月13日（土）～7月14日（日） 第2特別展示室

江戸時代前期に九谷（現石川県加賀市）で製作された色絵磁器「古九谷」と、古九谷窯廃絶後の江戸時代後期に製作された「再興九谷」の各作品、そしてそれらの伝統を受け継いだ近現代作家たちの作品を、二期に分けて紹介します。

リニユール・オープンブレ企画

石川県立美術館優品選

6月14日（土）～7月6日（日） 第1特別展示室

今年9月下旬にリニユール・オープンする石川県立美術館のブレ企画です。同館所蔵品の中から、特に精選した優品をご紹介します。

展示替えによる休館日（4～6月）

4月24日（木）～25日（金） 2日間

5月 休館日なし

6月2日（月）～3日（火） 2日間

6月12日（木）～13日（金） 2日間

本多の森から

脇田館長「林屋辰三郎先生の思い出」の原稿を読むうちに、林屋先生の温厚なお顔が目につきました。会議の席では、若い学芸員たちのどんな意見でもしっかりと聞いて下さり、いろいろなアドバイスをしていただきました。関西弁の優しい語り口でした。私たちにしても忘れられない先生です。

さて新年度を迎えて、私たちスタッフ一同気合い十分。様々な企画展や催し物を取り揃えて、皆様のご来館を心よりお待ちしております。